

第5章 藤原正彦先生を囲んで

第1節 藤原正彦先生のお話

柳澤　今回は、お茶の水女子大学の教授でいらしゃる藤原正彦先生にお話しいただくことになりました。藤原先生には、前々からお願いをしておりまして、お忙しい中いらしていただきました。この2時間を藤原先生と共有できることを嬉しく思います。藤原先生からのご要望で最初 40 分ぐらいお話をし、そのあと、質疑応答で、議論を白熱なさりたいたいとのことですので、有意義な時間としたいと思っております。それでは、早速始めたいと思います。

改めてご紹介させていただきます。お茶の水女子大学の藤原正彦先生です。

小学校における国語の重要性

藤原　私は、数学者なのですが、数学関係の講演はよく頼まれるのですが、何処へ行っても国語、国語、国語と言っているのですね。あまり教育のことには触れないつもりでずっといたのですが、中教審などでいろいろなことがありまして、去年の初めぐらいいからだんだん世論が誤った方向に話が進んでいくようなので、これでは黙っているわけにはいかないなと思った次第です。

今日は、どうして私が、算数ではなくて国語、国語と言っているかについて、お話しようと思います。どうしてそう思うかということ、小学校の場合、1に国語、2に国語、3、4がなく、5に算数といい、国語が他の科目とまったく本質的に違う重要性の条件で位置づけられているわけです。中高になると違いますけれど。どうしてそう思うかということ、今のところ、平成元年から週5日になる予定が中教審でやっていて、有馬さんがこの前書いてくれたのが、すごい陳情書の山になっているのですね。国語学会もやっているに違いないし、数学学会や日本の社会の中でも。そういう状況の中、日本ではどうするかということ、皆に等しく血を流してもらうことに決まっているのですね。学校において皆に血を流してもらう。平等にですね。従ってそうすると、国語もですね、平等に血を流すことになる。

中教審の方は、総合学習ということで、小学校に何をを入れるかということ、まず英語ですね。それから外国語、情報教育ですね。それから環境教育、異文化理解の教育。それはすべて私は大反対です。それは誤った方向です。結論的には国語に行き着くわけですが、その前に、順々に理由を述べていきます。

初等・中等教育のカリキュラム

もちろん、今出てきた教育というのは、これから 21 世紀のカリキュラムをどうしようか、ということですが、21 世紀のカリキュラムを考えることは、21 世紀の日本をどうするか、ということにほとんど等しいわけです。従って、そういう思いで決めてくれないと困るわけです。単に重要だからカリキュラムに入れる、というのが最も危険な考えということです。これがどんどんいくと、詰め込むことになるのです。そこで、初等・中等教育のカリキュラムを決定する 3 原則というのを、私は自分で作りました。その 3 原則とは何かというと、第一は学校で教えるのが適当かということです。これは、全国で小学生が毎年、自転車で何十人か、何百人か死んでいますね。それは、何百人死のうと、小学校のカリキュラムに自転車の安全な乗り方というのを入れてもらっては困るということです。その何百人の命が救われるとしても、入れてはいけない、ということです。それは、学校で教えるべきことではないということです。家庭とか、社会とかそういうところで教えるべきなのです。学校では自転車の安全な乗り方は教えない。それは、今の第一の原則、学校で教えるのが適当かに関してです。

第二の原則は国民の大多数にとって必要かです。例えば、バイオリン演奏というのは小学校では教えません。それは、国民の大多数にとって必要ではないからです。私の息子はバイオリンの演奏を 5 歳から習っています。そのお陰で、絶対音感というものがあります。ピアノの音を適当に 4 つぐらい弾くと、ぱっとあてることが出来ます。このように、すばらしい効果があるわけです。しかし、国民大多数にとって必要ではない。従って、カリキュラムに入れるのは困るというわけです。

第三番目の原則は、子どもの発達に即しているか。これは、別のことばでいうと、適齢かということです。例えば、哲学というのは、人間がどう生きるか、最も重要なものであるはずですが、小学生には絶対教えるべきではない、ということです。これは重要でありながら、適齢ではないからです。カリキュラムに何をに入れて重要視するかということは、この 3 原則をどれほどよく満たすか、それで科目間の優先順位が決まる、こういうふう考えたわけです。

特に、今言った 3 つの中で一番大切なのは、3 番の適齢のところですが、これが、ほとんどの学会では忘れていた部分です。例えば、英語を入れるとか、コンピュータを覚えさせるとか、環境教育、異文化理解などは、適齢という点から非常に疑問に感じます。

思考と情緒の基盤としての国語

この 3 つの原則を思うと、どう見ても、小学校での最優先教科は国語と算数である、ということは間違いのないことでもあります。昔から「読み書き算盤」と言われていたのが、「算盤」を算数に変えてみれば、故人の言うとおりでということになると思います。とりわけ、どうして国語の重要性がずば抜けているか、そういうことを思われたと思うのです。これは、国語は言語教育だけではなくて、すべての思考と情緒の基盤となる、そういうふう考えるからです。もちろん、人間というのは思考した、考えた結果を言語に表現するわけです。なんですけれども、それと同時に言語を用いて思考するという面があるわけで

す。すなわち、言語と思考というのは、ほとんど区別がつかないものです。

あるアメリカ人で日本に10何年いた人が、日本人は肩が凝ると言うがどうして肩が凝るかわからなかったというのですね。ところが、10何年経って日本語がわかるようになって、「肩が凝る」ということばを理解したら、本当に肩が凝り始めてしまった、というようなこともあるぐらいですから、生理的なことさえ言語と関係しているわけです。非常に思考と言語は紙一重であるわけです。

例えば、私の専門分野の数学みたいなものでも、言語というのは非常に重要です。例えば、和算というのが非常に発達しながら、ヨーロッパの数学にどんどん引き離されて、迎合されてしまったかというのは、一つには言語化という面で遅れをとってしまったのですね。要するに、言語化ということは非常に重要である。数学というのは、言語と思考の平行運動のようなものなのです。言語と一番離れているような数学でもそうです。

日本にいろいろ外国人が来て住んだりして、日本人の特徴についていろいろ言っているわけですが、昭和初年に、イギリスからサムソンという人が来たのです。その人が東京に暮らしてジャーナリストに頼まれて書いた文があるのですけれども、非常に日本人の美的感受性というのは素晴らしい、というのです。そのような美に対する日本人の繊細な感受性というのは、世界でも際立っている、と彼女は言うわけですね。他の人も非常に多くの外国の人も言っているわけですね。そのような感受性は日本人の特徴である。あるいは、一昨年、私の家をスタンフォード大学の教授が訪れたのですが、夏、皆で暑い、暑いと言っているときに、外で虫の音が聞こえたのです。そうしたら、彼が「あのノイズは何か」と聞きました。あのノイズ、雑音は何か。私の田舎のおばあちゃんは、秋になって虫が鳴くと、「もう秋だね」と目に涙を浮かべていたわけです。そのような「もののあはれ」とか、そういうようなものに関する感受性は日本人は非常に素晴らしい。このような日本人としての感覚とか情緒というのは、もちろん親から子へ、口から口へ移されたと同時に、重要な部分は詩歌をはじめとする文学を通して、日本人の胸に継承されてきているわけです。そういう意味でも、そういう文学を教えるという上からもことばの重要性というのは、ますます増しているわけです。

国際化に必要な日本人の「情緒」

これから、どんどん国際化ということになりますね。国際化というとき、英語だとか、あるいは世界一だとか、あるいは世界一計画だとか、あるいは西洋マナーだとか、外国事業だとか、そういうことになるわけですが、結局、そういうものをいくらマスターしても、外国に行って誰も認めてくれないのです。誰も尊敬してくれません。英語がいくら上手く使えても、国際人にはなれないのです。それは、アメリカ人もイギリス人も皆英語は上手いけれど、国際人といえる人は僕から見ると5分の1もいません。そうすると、国際人というのは英語とは全く無関係なのです。国際人というのはもちろん西洋マナーも無関係です。外国の地理も歴史も事情も無関係です。国際化ということに対して、一番強力なものは何かというと、一つ挙げるとすれば、私が今言ったような日本人固有の情緒です。そういうものは素晴らしいものである。外国人もこれは直ちに認識して、高く評価してくれる情緒なのです。私はアメリカで3年、イギリスで1年暮らしてました

けれど、そういう印象を受けました。

向こうの大学に行って、ノーベル賞級の学者たちと争うわけですが、競争になって、研究上挫折などをすると、「もうだめだ」と考えたりしがちだったのですけれども、そういうアプローチなしに西洋文化に立ち向かっていくときに、自分を支えてくれたのは、そういうような美しい情緒の国に生まれた、というような誇りです。世界における何かをしようとするときに、最も重要なものになるのですね。そういうところがほとんど誤解されているようなところだと思います。日本人のアイデンティティともいえるべきものは、今言った情緒です。美的、繊細だとか、「もののあはれ」です。そういうようなものは、どんどん伝統軽視の中で、信頼が膨らんでくるのです。こういう情緒を培う上で、文学、結局国語が重要な役割をするわけです。

小学校における英語教育について

それで、総合学習とさっき少し申し上げましたが、いちいち全部反対しないと、国語も算数も救われないので反対しているわけです。NHKで一度出されている「英語の教育を小学校に入れるかどうか」ということについても、私は反対なのです。小学校に英語をいれるなどということは、とんでもない大誤りなわけですね。これをしたらば、大変なことになる。世界の一流国で外国語を小学生に教えるということはほとんどありえないことです。中学校からは当然、特に日本は英語の授業が大変少ないですから、もっと増やさないといけないと思うのですけれども。小学校はまず、国語を確立しないと、思考の形成がなくなってしまうわけですね。そういうわけでどうしても国語をきちんとしなければいけない。ただ、その席である英語の学者にきくと、英語をすると、国際人になれるとか。これは、さっき言ったように嘘ですね。それから、その人はある会社の社長なのですけれども、英語をすると、その会社を全部英語で運営したい、というようなことなのですが、英語を公用語にして、英語でやると商談も上手くいくし、事業が円滑にいく。従って、英語をもっと小学校から勉強すべきだ、というのですね。結果として、国も経済的に反映するというのです。従って、私がイギリス人は皆英語が上手いけれども、この100年間経済は斜陽です、というのです。要するに、英語がしゃべれるかどうかは、経済とは全然関係ないです。

一般に言われている国際人は、本当の意味での国際人ではなくて、自己とか日本人としてのアイデンティティを失った国籍不明人、という意味ではないかと私には思えるわけです。従って、小学校から英語を教えれば、英語もかなり流暢にしゃべれる。日本語もかなり流暢にしゃべれる。そういう意味で、国籍不明人ができるわけです。しかし、思考のベースである国語というものがぐらついている以上、国際人にはなり得ないということになるわけです。一番いけないのは、例えば、日本語能力が日本人の6割、英語能力がアメリカ人、イギリス人の6割、そういうのが最も役に立たない人間なのですね。これは間違いないのです。10と0の方がはるかにいいですね。日本語10、英語0、あるいは英語10、日本語0の方が、6+6よりよい。6+6=12だから、10より12の方が大きいからよいと思うと大間違いでして、どちらの国でも使えない人間にしかたない。もちろん、10+5にすれば、一番理想ですけどね。なかなか10+3にできるかわかりませんからね。と

にかく、どちらかを10割にするということが、ある意味で、座標軸の確率というわけで、一番重要になるわけですね。

思考のベースである「情緒」

先ほどから、思考のベースだとか、座標軸とかいっていますが、どういうことかといいますと、人間の思考というのは、単純化するとどういうことかという、それは、Aという出発点から出発して、AならばB、BならばC、CならばDと行って、最後にZというところで結論がでるわけです。Aというのが最初の出発点。Aならば、という矢印が伸び、これが論理ですね。そういう論理の鎖をやって行って最後のZというところに着くわけです。従って、論理的思考というのは、すぐにできていきません。Zにいきいきや、そうはいかないですね。何故かという、一番最初のAというのは出発点であって、ここにはどこからも矢印がきていないわけですね。通常、Aの選択はその人の情緒力で選んでいくのです。常に、Aというのは仮説ですから、この仮説というのはその人の情緒力で選んでいく。その情緒力というのは、何によって培われていったものかという、その人がそれまでに、どのような親に育てられたか、どのような先生に出会ったか、どのような読書をしたか、どのような悲しい別れをしたのか、あるいは、どのような初恋をしたり、失恋をしたのかですね。そういうものすべてが、その人の情緒力となって、最初の出発点Aを選んだのです。その情緒力が十分に発達していないと、例えば、出発点Aを間違えて選んだ場合、その人が論理的に優れていればいるほど、頭が良ければよいほど、結論は絶対誤りになってしまうわけですね。最初の出発点が誤っていて途中の論理が正しければ、結論は必ず誤りになってしまう。その人があまり頭がよくなくて、途中で2転、3転論理の誤りを犯せば、元に戻って正しい結論になりますけれども、頭の良い人の怖さ、危険というのはそこにあるわけですね。途中の論理は間違えない、しかし、最初の出発点を間違えて選ぶ。ヒットラーのような頭の良い人も同じことですね。そのように、いくら頭が良くても最初を誤ると大変な結論になるわけです。

例えば、卑近な例で申し上げますと、一週間何も食べていない乞食がうろろうと歩いていた。そして街角のパン屋さんでパンを盗んで逃げたとしますね、それを見たある人が、「日本は法治国家である。法治国家において国民は法律を厳守しなければならいけない。あの乞食は人のものを黙って店からとってしまった。それは窃盗余罪である。従って当然法律に照らしあわせて罰しなければいけい。従って警察に通報しよう。」と論理を展開する。ある別の人、同じ光景を見て「ああ、かわいそうだ。確かに日本は法治国家である。しかし、あの乞食はパンを食べないと死んでしまうかもしれない。人間の命は一遍の法律よりも尊いものがある。従って見て見ぬふりをして、通り過ぎよう。」と結論を出すかもしれない。そうすると、最初の人、出発点は「日本は法治国家である」結論は「警察に通報しよう」ということです。二番目の人は、出発点は「ああ、かわいそうだ。」が出发点です。結論は「見て見ぬふりをして通り過ぎよう。」どちらも論理はきちりと通っているわけです。しかし、出発点のAが違うために結論が全然違うというように、論理的に正しくても、全くAの選び方で全く違う結論に達するわけです。すなわち、Aを選ぶ情緒というものが、非常に重要なわけです。そこがキーポイントなわけです。

もちろん、日本ではアメリカでも世界中そうですが、教育に関しては論理的思考力というのが常に重視されています。従って、私は論理的思考力については、あまりいう必要がないと思って言いません。しかし、情緒力の方ですね。ほとんど誰も言っていない。この情緒力がなければ、とても私の言っているようにはいかない。これは、いわば、先祖の方向感覚みたいなものです。例えば、決められたルートで船をこいでいくときには、そのようなものは要らないですね。しかし、嵐の夜、暗い夜に船で出るときには、どこに行っているか、全くわからない。そういうときには、方向感覚というものが非常に重要ですね。この情緒力というものが非常に重要である。この情緒力を培う上で、国語というのが、教科の中では最も重要である、というふうに私は思います。

情緒力を培うもの

昔は、この情緒力を選ぶ上で、何が一番よい教師であるかということ、貧困なのですね。世界中で貧困が一番いい教師だった。私が小学校のときは、例えば、給食費が払えないために、給食時になると、外に出て砂場で遊んでいる子がいました。小学校3年生ぐらいでしたけど、そういうのを見ておりますと、こちらの胸がぎゅうと締めつけられるわけですね。小学校3年生にでも、そういう貧困で食べられない子どもが仲間にいるということで、非常に目をひくわけですね。深い情緒というものを考えるわけです。そういう貧困というものが、現に一番影響した。私のクラスでは、その子が給食費を払えないどころか、遠足や修学旅行になると、必ず欠席しましたね。電車賃が払えないですから。ある程度先生がたまりかねて、給食費をポケットマネーで払ってやった。そういうことを通して、先生の気持ちですとか、いろいろな点でいろいろな情緒力を育てる上でいろいろな勉強になるわけです。

しかし、現在、貧困というものが無くなってしまった。現在、貧困が日本にあるといっても、それは美味しいものが食べられないだとか、よい車を買えないだとか、大きな家に住めないとか、そういう貧困で、私が言っている貧困というのは、餓死するかしないかという貧困ですから、そういう意味で日本やアメリカにはないわけです。その際、どうやって情緒を育てるかということが、これからの一番大きな問題だと私は教育の中で思うわけです。それには、いくつもあるわけですが、その中の大きな一つは、自然に親しむというのは素晴らしいですね。あるいは、祖父母と近しい関係を保つということも素晴らしいですね。例えば、私の父もそうでしたし、井上靖さんも似たようなことっていましたし、祖父母に育てられた作家というのは非常に多いです。やはり、祖父母というのは親と違って、非常に情緒的な教育というのがしやすい立場にありますから。

その他いろいろありますけれども、やはり、小学生のうちに、叙情文学をよく読ませるとかですね。あるいは、昔だと山彦学校とか、添田正綱さん、作文のいろいろなものがあります。ああいうのを読みますと、本当に当時の東北の貧困というものがどういうものか、あれによって、いろいろなことを学ぶことがあると思います。そういうような作文ですとか、文学を通じて、国語でいろいろな重要な情緒を学ぶ。情緒教育の大きな一端をになわなければいけません。

大人になる前にしておくべきこと

昔、芥川龍之介が神田かどこかの女学校に講演に行ったのですが、そのときに、ある女学校の生徒が立ち上がって、「先生、私は作家になりたいのですが、作家になるのに今のうちに何をしたらいいのでしょうか。」と聞いたそうです。そうすると、芥川龍之介が「算術をよくしときなさい。数学をやりなさい。」と言ったそうです。私がもし、女子校で講演をして同じ質問をされたとします。「私は数学者になりたいけれども、今のうちにどういう勉強をしたらよいだろうか。」という質問をされたとしたら、「今のうちによく文学を読んでおきなさい。」と必ずそう応えると思います。そのような教育というのは、今言ったような出発点Aを選ぶということなのですけれども、学問をする上でも非常に重要なことです。そういうことがないと、なかなか大きくなれない。特に、お茶大のすぐ側にお茶大は護国寺というところを降りるのですが、護国時の地下鉄を降りると、講談社なのです。講談社の右手を上ると、そこに「少年少女世界文学全集」というのがあって、その横に「早く読まない大人になっちゃう」と書いてあるのです。私はその文章を見て、非常に感激したのです。「早く読まない大人になっちゃう」、やはり子どもの頃にしておかなければならないことがあるわけです。それが、まさに国語であり、文学を読むこと、そしてそれを読んで涙を流すことです。そういうことが、大きな一つではないかと思うのです。

あるとき、数年前に、「朝日ジャーナル」という雑誌がまだあった頃、何人かの人々に子どものときに読んだ本で一番感激した本をもう一度読んでみて、それについて感想を書くということをやったのです。私も頼まれましたが、私が小学校のときに何に感激したかといいますが、『クオレ』という本に一番感激したのです。これは、今ではもう流行らないらしいのですけれども、「愛の学校」とかいう、その中には「母を訪ねて三千里」などの話がつまっているのです。そういうのを涙を流しながら読んだわけなのですけれども、それを再読しろというので、読んだのです。そうしたら、あまりにもくだらなすぎて読めないわけです。そのとき思ったことは2つのことだったのです。1つは、あのとき読んでおいてよかった、あのとき十分に涙を流せてよかった、とつくづくそう思いました。それから、2番目に、自分はまだ鋭い感受性を持っていると思ったけど、やはり多くのものを失ってしまったのだな、という2つの思いを感じたのを覚えております。小学校のときにそのような情緒をきちんと教えるのは大切だと思います。

総合学習への疑問

もちろん、先ほど英語がよくないと言ったことと同時に、パソコンも同じことです。パソコンを小学生に教える必要はまったくありません。高校は今義務教育の最終段階に近いですから、96パーセントの進学率です。高校では教えてほしいですね。でも、大学に行く人は教える必要はないですね。全く必要がありません。

ある私の学生の結婚式に出たら、そこにあるパソコンメーカーのコンピュータやさんがいまして、「お茶大の数学では、純粋数学しか教えてなくて、全然コンピュータを教えていなくてお茶大の教育は本当にいいのでしょうか。」というので、「全く構いませんよ。

コンピュータのこの字も知らなくて結構です。きちんと皆さん大学で勉強されて、論理的思考を身につけてくれればそれでもいいのです。コンピュータなら大学をでてからすぐに、そういう下地がある人は伸びます。ましてや、小学校ですということは、コンピュータの専門家にとっては、全員が不思議がっていますね。どうして小学校から入れるのだろうか。しかし、今は入る勢いで進んでいますね。異文化理解等も同じですね。例えば、小学校のうちに黒人と握手をさせよう、そうすれば人種偏見がなくなるのではないか、というようなことを聞いたりしますけれども、それでもしなくなるのなら、アメリカから人種偏見はとっくになくなってはいるはずですね。人種問題は解決しているはずですね。そういう生易しい問題ではないわけですね。環境問題もそうです。環境問題がこれからの21世紀の最重要テーマだから、という考えですね。しかし、一番最初に申し上げたように、重要であるからカリキュラムに入れるというのはとんでもない過ちですね。

そういう意味で、総合学習ということには、全面的に私は反対です。しかし、反対している人はほとんど日本人にはいないのです。というのは、どれも全部一番重要なことですね。従って、例えば英語に関して、父兄の統計をとると、ほとんどの人が賛成なのです。自分がしゃべれないのは小学校で英語を習わなかったからだと思っている。あるいは、とんでもない大間違いで、中学校以降の英語の先生の教育が全くなっていないからだとかです。英語学者が英語教育の過ちを苦として、そのように小学校で習わないからと感じて、導入しようとするのはとんでもない行為だと思います。私は中学校から英語を習い始めて、何の不都合もない。数学の場合もそれは同じです。

実践国家としてのアメリカ

このような教育改革というのがどんどん行われている一つの大きな理由は、アメリカ化現象なのですね。憂うべきアメリカが日本を完全に凍りつけています。日本の学識経験者たちの多くが、日本のリーダーたちが、アメリカコンプレックスなのです。なぜかという、その人たちの多くは、特に理系の人は、1950年代から1960年代前半までにアメリカに行っている人たちなのです。留学という形で、向こうの大学院に行ったり、研究所に行ったり。そのころの彼我の落差はすごかったですね。日本ではない冷蔵庫があるし、それからこちらはラジオ、向こうはテレビ、こちらは車が全然ない時代にアメリカでは一家に車2、3台、水が出てくる蛇口しかないのに、向こうはお湯が出てくる、そういうようなものを見て、とにかくアメリカ一辺倒になってしまったわけです。このアメリカ一辺倒というのは、非常に危険である。これは但し日本だけではなくて、ヨーロッパもそうです。今のEC騒ぎなども完全に間違った道を歩いている。ヨーロッパを合衆国化しようという、あれはドイツ、フランス、イギリスを含めて、指導者に責任があると思います。もちろん、結果はもう見えているわけですが。アメリカはいいのです。アメリカは移民の国ですから、あれをどんどんやってほしいのですけれども、他の歴史ある国が自分たちの文化とか伝統をかなぐり捨てて、アメリカのまねをすると、絶対にうまくいかないというのが目に見えています。

例えば、アメリカは10数年前にこういうことを考えています。アメリカの国民はすべてタイプライターが必要である。これは確かなのです。今はどうか分かりませんが、10

数年前にアメリカでタイプを打たない人間はいないのです。従って、高校の英語の時間にタイプライターを教えたのです。そうしたら、何年かしたら、陸軍の新兵さんの 20 パーセントが機関銃の取扱書が読めなくなってしまったのです。それで、国防省が驚いて、『危機に立つ国家』という本を出しました。それで、タイプライターは英語の時間から追い出されてしまったのです。アメリカではいつもそういうように、非常に頭のいい人々がよく熟慮している。論理的にいいと思ったら、それを直ちに実行する。だめなら直ちに撤廃する、それがアメリカです。現在、アメリカの小中学校の 1 万 8 千校は株式当主、この株式当主法というのは、本当にお金を出しているのではなくて、小学生などが、例えばキャノンならキャノンの株を千株買っておいて、3 ヶ月後にどちらが勝つか勝負するなど、そういうことによって資本主義社会に生きていくアメリカ人にとって、必須の経済意識を得ることができる。子どもの社会とか経済に対する目を開かせることができる。それを頭のいい人たちが考えているわけですから、いろいろいい意見がありますね。こういうことをやっていますが、これは数年後に必ずまた撤廃されます。これが、しばらくして、世界のいろいろな国際的教育到達テストなどがありますが、アメリカの生徒が算数とか国語でまた芳しくない成績をとるわけです。要するに、基礎力の低下を免れないわけです。アメリカというのは常にこのように実践国家ですから、実験を繰り返します。いいと思ったら、実行して、それが何年かして悪かったらやめるというふうです。ところが、このやり方を日本はまねをしてはいけません。というのは、アメリカはそれができる世界で唯一の国なのです。大きな実験をして、失敗したらやめられる国はアメリカしかないのです。日本とかヨーロッパの国々は大きな失敗をしたら、もうそれでだめなのです。非常にダメージが大きいわけです。

アメリカだけはどうしてもだめではないかという、アメリカをアメリカたらしめているところは何かというと、自由でも平等でも何でもありません。アメリカは自由でも平等でもありません。アメリカをアメリカたらしめているところは、富なのです。類いまれな富ですね。あれだけの大きな国土、肥沃な大地、それから天然資源、あらゆる点ですばらしい富を神から授かった国です。あのような国では、多少の失敗で国民が飢え死にすることは無いわけです。それから、多少国民のレベルが下がって、今でも小中学校はほとんど破局的になっていますが、それでもアメリカは転ばないのです。なぜかという、トップエリートたちが次々に世界から集まってきます。アメリカの富を狙ってです。完全な実力社会ですから、外国の人たちが来るのにはもってこいです。イギリスからもどんどん学生たちがアメリカに今でも流出しています。日本からもたくさん行っています。世界中から多くの人たちが行っているわけです。従って、アメリカはなかなか疲弊しないわけです。そういう非常に特殊な構造で、他の国はとてまねできない。

従って、アメリカのように、論理的に一生懸命考えて、これがいいからやろうということは困るのです。だから、さっき言った総合学習というのは、全部論理的にいいことなのです。しかし、それをやってしまうと、大変なことになってしまう。

日本の個性を大切にす

日本の場合、どうしたらいいかという、やはり日本は伝統国家ですね。伝統国家の

良さというのは何かというと、例えば、初等教育では「読み書き算盤」というものが昔から寺子屋の時代からあったわけです。国語と算数が一番大事だよ、ということですが、そこをやはり、きちんと崩してはいけないわけです。でないと、これからもありとあらゆるすばらしいアイデアが出てきますね。先ほどの「株式当主法」もすばらしいアイデアです。「タイプライター」もそうでした。それからまた、パソコンや英語も全部すばらしいアイデアです。このように、どんどん出てきます。しかし、そういうのはほとんど考慮する価値もないことなのです。これからどんないいアイデアがでてきても、少なくとも、国語に食い入るようなアイデアは全部だめである。私は国語をそうやって守らないと守りきれないだろうと思うわけです。アメリカのまねをしてはいけないということですね。

いわば、その伝統のある文化の形というものをもっているわけですから、その形を大事にするということですね。そういう意味で、一国には一国の個性というものがあるわけですね、日本には日本の個性、ドイツにはドイツの。タイにはタイの個性があるわけです。そして、そこに住む人々の胸にそのような個性というか、固有の情緒というものがあるから脈打ってきているわけです。そのような情緒とか、学校教育からの接点というのが、まさに国語である。小学校においては、何をさておき、その情緒を植え付けなければならないと思うわけです。従って、私は国語は言語的な側面に絞るべきである、技術的な側面に縛るべきであるという議論はとんでもない誤りだと思います。そのようなことをいう人は国語の敵なわけですね。というのは、それを強調している限りは必ず国語は没落する、必ず英語との差がつかなくなってしまうのです。私たちが学生のころは、ドイツ語もフランス語もありましたけれども、今はもう完全に英語の一人勝ちになってしまいました。この世界にあって、どんどん、どんどん、英語が出てくる。支配的になってくる。そこで、やはり国語、日本語が土に落ちていっているような、それは国家が土に落ちていっているのと同じことですが、そのためには国語、言語技術の問題に絞っている場合、非常に悪い、不利な、自らを滅ぼすような選択であるとそういうふう思うわけです。やはり、情緒との接点です。それを国語で強調していかないと、他の学科で肩代わりできないのです。従って、その国語教育を通して、郷土とか祖国への誇りとか、あるいは、先ほど言った美しいものに対する感受性、感動、この美に対する感動力というのは理系の学問をする上で、特に数学などでは最も重要なものです。それから「もののあはれ」です。これは、世界に誇りうる最もすばらしい情緒です。あるいは、他人の不幸への敏感さですとか、あるいは懐かしさですとか、あるいは卑怯を憎む心ですとか、これは、武士道精神のいっているところです。こういうのを教えないと、いじめなどが起きるわけですね。

例えば、武士道精神で卑怯を憎む心というのはどういうものかということ、例えば、大勢で一人を殴ることはよくないなどです。これはどうしてか、と問われれば、誰も論理的に答えることはできないわけです。しかし、それは卑怯なわけです。理由はなく卑怯だ、それが日本人の考え方です。あるいは、大きい者が小さい者を殴ることも卑怯なのです。これも理由はありません。小さい者が悪いことをしたから殴ってもいいのではないかと、というのは論理ですね。そうではなくて、とにかく、大きい人は小さい人を殴ってはいけないのです。大勢で一人を殴ってもいけない、あるいは、男が女を殴ってはいけない、そういうようなとにかく形です。そういう形がある国はそういう形について教えずにはいけないと思います。

書かせること話させること

このような形等を何の時間で教えるかという、やはり国語あるいは大きな意味での国語の時間に、それは倫理とか道徳とかそれらを含めた全教科でも、大きな意味での国語です。そういう意味では、読書とか作文とか特に最近そういうものが廃れてきているのは非常に残念です。そういうものへの期待は非常に大きいのです。例えば、先ほどから情緒のことしかいっていませんけれども、論理的思考力というのもやはりそれを育てるのには国語が一番なのです。数学とか算数をやると、論理的思考力が身につく、これは文部省が言っています、あるいは数学者も言っていますけれども、これは全部大嘘ですね。それが証拠に、教授会で数学者のいうことは全然論理的ではないですね。いつもエキセントリックな様子で情緒的なことを言っているわけです。それで、皆から鼻つまみ者になるわけですけれども。一番論理的な思考力を養成するのによい方法は、書かせること、それから話させることですね。それは、論理的なことばの応酬としての理論、論理のことばを表現する作文です。そういう意味で論理的思考の訓練には作文が一番いい。数学は確かに論理は使いますが、数学における論理というのは、我々が普通に使う論理とはかけ離れているので、全く役に立たないのです。従って、国語において、論理的思考を養うのが一番よい。そういうことを言うと、数学者の人たちは皆、自分たちのテリトリーがなくなってしまうのではないかとということで嫌がるのですけれども。しかし、論理的思考に関しては、数学には全く別のよく考える喜びを育てるですとか、他の重要なことがあるのです。

明治の頃の国際人

このようなことを通して、先ほどの国際人ということにも貢献するわけです。明治維新のころ、多くの日本人が欧米等に行っているわけです。下級武士、上級武士、あるいは大工の棟梁に至るまで。そして、その人たちが皆尊敬されて帰ってくるわけです。今の商社マン等は外国に行っても、羨望はされるけれども、尊敬はされないのですね。どこが違うかという、もちろん英語力は今の人の方が上ですね。外国の歴史や地理も今の人の方が上ですね。当時の人の持っていたものは何かというと、その人たちの多くは英語が話せないですね、となると持っているものは、単に日本の古典ですとか、漢籍です。そのような教養と、武士道精神、それぐらいですね。それで、非常に皆から尊敬をされ、感銘を与えたわけですね。そういうものから、品格とか情緒力が重要だということがわかります。これは、明治に限らず、1582年には天正の少年使節がヨーロッパに行くわけです。10代の少年たちが向こうに行って、非常に人々を感激させたわけですね。伝道に携わると婦人方が涙を流して見送ったという、そのような立派な品格ですとか、礼法、そういうものに感動したわけです。そういうふう、古典とか漢籍などそのような教養でも世界に通じるわけです。

21世紀の課題 ~ 国語の充実 ~

最近の大学生をみていると、国語力の低下が著しいですね。それと同時に、思考力の

低下、それから情緒力の低下、その3つが3拍子揃って全部低下していますね。ですが、私に言わせると、国語力低下、思考力低下、情緒力低下というのは、全部同根である。これは、一つには戦前に比べて、3, 4割国語の時間が減らされているからです。例えば、大正7年には、小学校4年生で週14時間ありました。それが、昭和15年には12時間になり、2時間減らされました。それが、今では小学校で6, 7時間に減らされています。そのように、ほとんど半減近く大正と比較して減らされていますし、戦前の昭和に比べても3, 4割減らされています。そういう国語時間数にも責任の一環はあると思います。もちろん、国語の教え方等も改革する意見はずいぶんありますが、私に言わせると、やはり21世紀の教員というものを考える場合に、非常に地味なのですけれども、国語の特に初等課程における国語の飛躍的充実、それが21世紀の最もすばらしい与件になるのではないかと思います。以上です。

第2節 藤原正彦先生との話し合い

日本語が受ける影響

柳澤 ここからは、たぶん質問が多いのかもしれませんが、自由な時間とさせていただきますので、手を挙げてお話しください。

まず、私から口を切らせていただきます。私がアメリカで日本語を教えたときに、アメリカの大学院生で日本語を勉強するクラスというのは、実は彼らにとってアジアという中国であり、中国の研究の延長線上として、中国関係の資料を読むためなどの目的で日本語を勉強しています。彼らは中国語はわかりますし、それから日本語も中国のことを知るために日本語で書かれた古い文献を読むために古典語から勉強しています。彼らにとって、現代日本語はかなりあいまいだと言います。一方、日本語だけを勉強している人がいます。彼らが1年生に入ってくると、彼らは現代日本語から入っているものですから、古典日本語の学習で困ってしまう。この違いの一つに語彙量と意味機能や用法の違いがあります。表現の豊かさの違いが、古典日本語と現代日本語とでかなり違いがあるようです。そこで、藤原先生にお尋ねしたいのですが、「感受性の中での国語」ということが一つの大きなポイントだと思います。国語としての日本語に幅広さがあると思います。

藤原 幅広さというのは。

柳澤 語彙にも、表現力にも、言語そのものやその形式の捉え方にも幅広いものが時代や地域などによって存在すると思います。

藤原 それは、確かにその国の情緒力によって、言語は影響を受けておりますね。例えば、日本ですと、「雨」に関することばがたくさんあります。「五月雨」や「梅雨」、「にわか雨」だとかたくさんありますね。しかし、英語などではそれはありません。エスキモーにきくと、「雪」に関する表現が何十種類もあるらしいです。日本は「粉雪」とか「ぼた雪」とかいくつかしかないと思います。あるいは、インドに行くと、「牛」の表現がい

るいろいろありますね。そういう意味で、現在の日本語が彼らとして勉強しにくいというのは、仕方がないことです。

柳澤 一つの語彙でいろいろなものを表す、あるいは一つの語彙をくっつけて別のことを表すなど、言語がその国の社会状態を示します。言語が、社会と密着しているということです。学校教育の中でことばの取り扱い、ことばを通して社会状況を受ける部分と、ある部分から社会をうかがうという部分との二つを持つのではないかと思うのです。

藤原 それは、難しいことですね。国語審議会などでも「ら抜き」などいろいろ言われていますけれども、要するに、古来の日本語の文法が日本語を規定するのか、日本語が文法を規定するのかという問題ですね。そここのところは、結論的にどちらとも言えないと思うのです。しかし、現行の日本語にすべてどんどんいってしまうと、日本語はどんどん汚く悪くなります。その部分の兼ね合いが非常に重要ではないかなと思います。ですから、一方にそれでは日本語がおかしいという意見になるわけです。しかし、教育の場合においては、やはり正しい日本語を教えないと。というのはやはり、流行りことばというのはどうせ5年から10年で廃れていくわけです。

私もアメリカにいたときに、アメリカのスラングをすごく興味を持って、いろいろ書いたり覚えたりしましたけれども、今、誰もそういうことばは使わないですね。時々使うと、笑われてしまうのですが、日本語もそうですね。例えば、私の子どもころには「ああ、頭にきた」などと言っていたけれども、最近、小学生の子どもに「頭にきた」などと言っても誰にもわからないのですね。

従って、なるべく基本となる、きちんとした正しい文法ときちんとした日本語を教えていく、と理解していただいたらどうでしょうか。

小学校の中で感受力をどう育てるか

氏原 先生のお話をお伺いしまして、皆さん同じだと思うのですけれども、非常に感動いたしました。いろいろなことをお話したい気がするのですけれども、一つは、私も高等学校の教員をやっています、例えば、私が高校時代に初めて「山月記」を読んで大変なショックを受けて、その夜は寝るのが怖かった、目が覚めると自分が虎になっているのではないかと思って、夜眠れなかった、というような話を生徒にするわけです。そうすると、冗談だと思って皆笑っているわけですね。何となく冗談だと思って笑っているだけなのだろうと最初は思っていたのですけれども、だんだん、先生のおっしゃるところの情緒力、私は感受力と呼んでいるのですが、そういうところに、非常に問題があるのではないかと思うようになってきました。つまり、直感的にその作品の持っている本質的なものを全体的につかんでしまう、という能力というか、そういう意味での直感的な感情というか、情緒的な感情というか、そういうものがどうも十分に育てられていないのではないかと。そうすると、先ほどの先生のお話で21世紀の国語、21世紀の教育というものを考えたときに、小学校の国語教育の飛躍的な充実が鍵となるだろう、ということをおっしゃいましたが、その中身というのは先生がおっしゃったように、情緒的感情というものを果たして小学校の国語教育の中で育てることができるのかどうかが決定的な意味を持つわけです。私が今「山月記」について話をしたのは、よく言われる話ですけれども、能力には学校教育

で育てられる部分と、それ以前の家庭とか、環境の中で育てられる部分とがあると思うのですが、この情緒力を小学校の教育の中で、どうやったらうまく育てることができるのが気になってしまうのです。子どもは小学校に上がる前にすでにもう、ある程度形作られている部分もあって、そういった情緒力のような大切な能力を小学校の教育の中で本当に保障できるのかどうか、ということを感じるので。

それからもう一つは、先生のお話で実は論理的思考力というものを国語教育で担う、ということで、私もそうだと思っていますし、またそうありたいと思っているのですが、実はその論理的思考力そのものも、先生のおっしゃるところの情緒力というのと関連していると思うのです。それがないと、本当の意味で論理的思考力というのは育たないのではないかな、という気がしているのです。というのは、日常生活における論理的な思考というのは、むしろ1から順番に、1があるから2があって、2があるから3があってという、さっきの先生のお話で言えば、AからZまでつながっていくわけですがけれども、そのAからZまでつながっていくのに、いちいちものを捉えていくのではなくて、AからZまでの全体を瞬間的に捉えて、Zにいつてしまうみたいなですね、Zにいつてしまった後で、実は分析していけば、その間にBがあり、Cがあり、Dがあり、Eがあり、Fがありということになると思うのですけれども……。能力の在り方としては、むしろ、AからそのままZを直感的に掴んでしまうような気がします。ですから、情緒的感受力と論理的思考力とは密接に絡んでいるということですね、私はそう思っているのですけれども、先生のお考えではその辺いかがでしょうか。

藤原 最初の方の小学校に上がる前から、もうかなり規定されてしまっている、というのは確かなのですね。それを子どもに投げかける、教育はすべてそうですね。いかなる小さな問題も大きな問題も全部一箇所、要するにこんがらがった糸と同じで、一部分だけほぐしても、それは全体としてはほぐれないのですね。しかし、例えば、小学校に上がる前の幼稚園で4つか5つぐらいのときに、お母さんと夕方買い物に行ったとします。そして、帰り道に夕焼けがきれいだった。お母さんは、立ち止まって「あら、きれいな夕焼けだわ」と嘆息しないといけなわけですね。そうすることによって、夕焼けというものは美しいのだ、そういう美しいという気持ちが感動力という中にそこで養われるのですね。私たちの美しいものに対する感動力とか感受性というものは、自然に生まれる性質を持っているものではないと思うのですね。教育によって、だんだんと培われるものなのですね。

例えば、美しい音楽を聞いて感動する、これも一つですね。例えば、ベートーベンでもモーツァルトでも、30歳になって聞かせたら、何の感動もしなくなるのですね。やはり、そういう環境に置かないと。そういう意味で、美しいものに対する感動力、あるいは不幸な者に対する敏感さなども含めて、やはり親が子に教えるのが一番大きなことなのですね。

先ほど言った、貧困というのがありましたが、現在そういうことはなくなったけれども、やはり依然として、家庭教育が一番なのですね。大きなことですね。私が国語に一番期待するというのは、学校教科の中では国語以外の教科には期待できないだろうということなのです。数学、算数や理科や社会や体育には、小学校においては期待できない。やはり、国語に一番期待されると感じるわけです。そういう意味で、小学校においては、情緒教育が非常に国語で担っているわけです。

ですから、家庭教育ですとか、社会ですとか、あるいは他にも自然に親しむ教育です。現場の中に入っていくと、春になると芽がふいて命が生まれる、秋になると虫が死んで、葉が落ちてだとか、そういうふうには生と死というものがありますね。ほとんどの人間の大きな情緒というのは死と裏腹になっていますから、要するに、有限時間の後に我々ここにいる人すべてが朽ち果てる。そういうふうな意識というのが人間の一番深い感情と直接関わっています。ですから、山に行って、そういうような動物、それから生死を見る、あるいは悠久な自然と人との対比を見る、そういうことによって、非常に良い情緒教育ができます。しかし、そういうことの他に、学校においては、ということですけども。

それから、第二の点に関しては、AとZだけ言っても、他の人は誰も納得しません。従って、説得の技術の手段として、B、C、Dを入れて、「ほら、どうだ。何かあるか。」と。数学もそうです。数学においても、我々は何か数学の新しい定理を作るときには、結論と最初を全部、または結論をいきなり見てしまうのです。それから、委曲をこしらえるのです。その力がないとだめなのですね。従って、そういう意味で、論理と同一力の関係というのは、本当は矢印でいくというのは説明上で、本当は $A = Z$ なのですね。AとZは同一形であるという同一力が必要なのです。

21 世紀に必要な情緒力

今度 21 世紀になると、ある意味で、情報量の爆発的増大ということがあります。そうなってくると、ものすごい情報量になって、その中で溺れてしまうのです。現在でも、人間の多くの人が溺れています。子どもも大人もです。子どもが溺れているという前に、大人自身も溺れています。そのときに、いちいち色々なものを論理的に考えて吟味してこれを取ろう、これを捨てよう、というわけにはいかない時代になるのです。やはり、一刀両断のもとに、情緒力でぱっ、ぱっと切り捨てると、それが非常に重要な能力なのです。それは現在、我々が教育の日常、何を託するべく託されているかということですね。論理的に正しいことというのは、この世の中にごろごろあるわけです。何を考えてもごろごろしています。例えば、これからのカリキュラムをどうするか、これも論理的にいいますと、中教審のいっていることは正しいこと、これも正しい、あれも正しい。その中からどれを選ぶか、そこで、その人の人間の真骨頂なのです。能力ですね。どれを選ぶか。それで、今まさにAとZをどれを選ぶか。全部論理的には正しいのです。その中からどれを選ぶか。それがその人の情緒力であり、全人間的なパワーなのですね。それによって、その人の価値判断をされてしまうのです。その力をつけるためには、どうしてもさっき言ったような情緒というものがないとこれを選ぶ力はないのだと、それに一番重要なのだということですね。

教材と教師

安 小学校の国語教育を考えたいのです。第一は教科書を中心とした教材の面、そして第二は、教師教育のことでお伺いしたいのです。

まず教科書ですが、小学校でも中学校でも教材というと、どうしても教科書というのが大きな影響を持った中心教材になります。ただ、教科書の場合、例えば、先生がおっしゃった、郷土の問題、郷土の教材というのも掲載されていないことはないでしょうが、どうしても不十分です。なぜなら、全国画一的な共通の教科書が出版所から作られるからです。郷土教材の問題は一例であります。他の種類の教材においても、複数の教科書出版会社があるにもかかわらず、比較的画一的な教材選択がされています。そのような状況に対して、先生からご覧になって、例えば小学校の教材で、こういう種類の教材がもっとあるべきだ、必要なのではないかと、というような点がもしございましたら、教えていただきたいと思えます。

第二は、教師の問題です。我々も国語の重要性というのは常々認識しているつもりです。そして、国語力という点で、子どもたちが影響されるところに教科書と教師があると思います。先生がおっしゃるように、小学校では圧倒的に国語の時間が多いのです。特に、小学校低学年だと全体の3分の1以上の授業が、国語の授業に充てられます。しかし、教員養成学部の小学校教員養成課程ですと、国語も図工も音楽も全部同じ単位数なのです。小学校での授業時数の少ない教科も多い教科も、均一均等に修得単位が設定されています。しかし、教壇に立つと、この圧倒的に授業時数の多い国語を一番長い時間指導するわけです。こういう制約のもとで、国語の教師養成がかなり窮屈になっています。それでもその中で、我々はいろいろと試行錯誤をしています。小学校の教師を育てるにあたって、先生からご覧になって、こういう点だけは学生に身につけさせておいたらよいのではないかと、というような点がございましたら、お教えいただきたいのです。

藤原 第一の点と教科書の方で、郷土愛を育てるといっているのは徹底しているわけなので、すね。しかし、国の教科書ではなかなか育てるのが難しい場合には、郷土によっては、副読本のようなものを、国語の時間が全部郷土のものでは困るので、増やしてもらって、郷土のことをいろいろ学ぶのです。それで、郷土に対する愛情を深める。それがないと、世界の人に全然相手にしてもらえないのです。日本人で日本を愛さない人間というのは、外に出て全然通用しない。あるいは、よく学生などにいうと、郷土を愛するとか、国を愛するとかそういうような感情を持っていると、戦争の原因になるというようなことをいうのですが、私から見ると、愛情意識を持っていない人がまさに戦争を起こす人だと思えます。国を本当に愛することができる人は、他国の人々の同じような気持ちを理解することができるのです。例えば、中国から中国人で中国を愛する人がいる。朝鮮人が朝鮮を愛すべき感情、ドイツ人がドイツを愛する感情、これは皆よくわかりますから、とても残酷な侵略を起こす気にはならない。人間が家族を愛する、友達を愛する、郷土を愛する、国を愛する、人間にとってそれがないと話にならないのです。そういう意味で昔の愛国的という意味ではなくて、真の意味で愛するということです。そういうのが郷土愛です。昔は太平洋戦争に大々的に突入するような軍国主義的な要素が多すぎたのでそれに対してのわだかまりがありますが、そういうものではないのです。やはり、日本の美しさとかすばらしい文化があるわけですから、そういうものを教える手だてを考えるわけです。それには、副読本でそういうことを教えればよいわけです。教科書の内容については、私はよく検討したことがないのですけれども。

2番目の教師の養成の方は、国語に限らず理科も算数も全部が今、大問題です。これ

は、本当に改革しなければいけないものです。これは、また、さっきと同じように、こんがらがった糸が一つで、これからもすごく大変です。要するに、ある意味で、大学の先生の教え方を比較して日本の先生が飛び抜けてへたなのです。日本人よりアメリカ人の方が圧倒的に講義の仕方がうまいですね。一般的に言って、アメリカ人よりフランス人の方がもっとうまいのです。イギリス人はあまりうまくないのですけれども。そういうような講義のうまさだとかいうものは、一国の言語操作にかなり根ざしているのです。例えば、日本では、べらべらしゃべるやつは軽薄だとか、いろいろと言われますけれども、それよりも腹芸だとか、あうんの呼吸というものが重要視されるのです。寡黙な人ほど重厚だと思われるわけです。そういうような国民では、講義だけうまくといっても、なかなか日本人では難しいですね。それと、同じことが、先生にとって非常に重要なことはやはり、魅力的なパーソナリティーということです。これを言ってしまうとおしまいだと言われてしまうのです。数学教育学会に行っても、「数学が嫌われるのは、数学の先生のパーソナリティーが魅力的ではないからだ」と私は言ってしまうのです。しかし、それを言っておしまいだ、といわれてしまうのですが、実際そうなのですね。

国語もだんだん高等学校高学年になるにつれて、嫌われてくる。それはやはり、先生のパーソナリティーということ、国語の先生というのかもしれませんが、先生自身のパーソナリティーです。そういう意味で、学校の先生というのは、非常に多くの点で資質を必要とする職業なのです。大学の先生などでは、学問を教えているのだったら楽ですけども、人間的な魅力というのはそう簡単に誰にでも備わっているものではありません。そういう意味で、現在の国語科に限らず、先生養成システム、それ自身が全面的に改められなければならないわけですね。

今、例えば、国語なら国語で国語科教育法とか、いろいろ技術的なことを、こういうものをこういう順序で教えるといいですよとか、それから数学でも理科でも皆行われています。しかし、どうしてもうまくいかない。それは、やはり先生のパーソナリティー、そういうような部分への大学側の配慮というか、育てる側の認識ががまだ薄いのではないか、と思うわけです。ことのところは、そういうところでやはりきまってしまうのです。

例えば、国語の先生が、よく作文を書かせる、そして結局は励ますかどうかです。いい点、一行見つけて、それを励ませるかどうかが、それで、その子が作文を好きになるかどうかは決まってしまうわけです。しかし、いいところを見つけて励ますというのは、先生にとって、大変な能力なのです。へたな作文では少しいいところを見つけるだけでも大変なわけです。それで、励ますというのはとても大変な能力です。そういうようなパーソナリティーをもっと重要視したような教員養成にしないと。小学校の段階ではなくて、大学の養成システムの段階の問題ですね。

例えば、国語ですと毎年、同じ文章を読ませなくてははいけませんけれども、数学ですと「ピタゴラスの定理」というのがあります。数学の先生にいうと、私がいつか、ピタゴラスの定理で、直角三角形のこの辺の2乗+この辺の2乗=斜辺の2乗というのがありますよね。ああいうのはどういう定理なのだ、どこに地球上にとっても大きい直角三角形を書いても、小さな顕微鏡で三角形を書いても、同じように成り立っている。あるいは、三角形の内角の和は180度であるが、どのような平べったい三角形を書こうと、とんがった三角形を書こうと、大きな三角形、小さな三角形、何を書いても180度になる。寸分違わず

180 度になる。これは論理的な理学なのである。そうって、先生が感動して驚いてみせなければいけない、そのように言ったら、終わった後、教育系の大学の先生がいらして、「藤原先生、毎年毎年、そんなことは絶対できませんよ。」というのですね。それはわかるけれども、それをできるか、できないかだけで先生としての資質だと思うのですね。そういったパフォーマンスはどうしても必要ですね。そうしないと、生徒は単に平行線を引いて、証明して、「はら、三角形の内角の和は 180 度だよ。」といったとしても、面白くも何ともないのですね。そういう生徒から見て、魅力的なパーソナリティを育てる。各教科のフレックス・ポイントですね。国語に限らず全てですね。

大学教育で情緒力を身につけることは可能か

氏原 今の安さんのお話の教員養成にかかわることですが、例えば小学校の先生が国語を教える場合と、当然先生に求められる資質の大きな要素として、まず、先生のおっしゃるところの情緒力、それから、もちろん論理的思考力があるわけです。そういったものをその先生自身が持っていなければいけないわけですね。持っていなければ、そういう視点がないから、当然子どもたちに指導するというのもないと思います。あるいは自分が意識すればこそ、子どもたちにどうやって指導していくかという手がかりを見つけようということになっていくわけですから、そういうことを先生自身が身につけていなければならない。そこが非常に難しいと思うのですが、先ほどから小学校の低学年ぐらいからということで話がずっと流れてきているのですが、そのような機会がないまま、あまりそういった力が身につかなかった人が、例えば大学生ぐらいになって、教員養成という中で、そういった力を身につけることはできるのか、どうか。子どもたちの今後のことを考えると、このような力が必須の力だとすれば、例えば大学生ぐらいになってからの 3 年なり、4 年なりでそういった力を身につけられるのかが大きな問題だと思います。教員養成課程を出て、実際に教員になる先生方がそういう力を是非もってほしいわけですね。つまり、そういう人たちが大学教育の中で、情緒力を身につけることが藤原先生は可能だと思われませんか。そのあたりをお聞きしたいと思うのですが。

藤原 そういう意味で、少し手遅れかな、という感じがするのです。やはり、そこでさっき言った「早く読まないとな大人になっちゃう」というのがそうなのですね。大人になってしまうと、もうだめなのです。それが、人間的なパーソナリティーの問題だけではなく、学問的にもそうです。例えば、1 年ちょっと私がある大学で教えていたときに、ある時オックスフォード大学から講演をしてくれというので、オックスフォード大学に行ったのです。講演といっても数学の講演ですけども。そのあと、先生方とお茶を飲んでいたら、向こうの方に小さな女の子がお茶を飲んでいるのです。「あの方は誰かのお嬢さんですか」と聞きましたら、「あれは、今 14 歳でドクター論文を書いているのです。」という答えで、よく話を聞きましたら、ロイス = ローレンスという有名な天才だったのです。その子は、オックスフォード大学に入ったのが 11 歳だったのです。そして、16 歳でドクターを取っているのです。17 歳でハーバード大学の講師になっているのです。そのようにすべて世界新記録なのですね。結局、その子はどのような生活をしていたかということ、4 歳か 5 歳のときに、お父さんがコンピュータ技士だったのですけれども、ロイスが天才だ

と確信して、もうこの子はすべてを捨てて数学にかけよう、ということで数学ばかりやったのです。自分は会社を辞めてその子と一緒に中学、高校、皆2年ずつぐらいで飛んでいくわけです。そして、11歳のときに大学に入ったのです。シンポジウムとか学会をやるのです。それで、結局はそうして今25歳ぐらいなのです。今、一言で言うと伸び悩んでいるのです。結局、その子は5歳ぐらいに父親が気づいたときから、算数、数学しかやってきていないのです。従って、その間に、例えば、幼稚園のころにその辺の子たちと砂場で遊んだり、あるいは友達と野山を走り回りますとか、小説を読んで涙を流すですとか、初恋や失恋をするですとか、そういうことを全部飛ばしているわけです。お父さんと2人で数学一筋できたわけです。それで、その分野の学問の努力と才能による一番トップの地位にまではきたのですが、そこから後は、その方向に向くかどうか、天上を上に行くかどうかです。そこで初めて、さっき言った情緒力が試されるのです。それで今迷ってしまっているのです。従って、そういう意味で、子どものとき、特に小学校ぐらいまでに、生まれてきたときからでいいのですけれども、まず小学校ではそういうことはやりませんから、その間に一生懸命情緒力をつけて、そして大学出てからの勝負です。それに、勝つような人間に育てなければいけないのです。ですけれども、母親などはそのような長丁場のことは考えられませんから、目先の受験に惑わされてしまいますけれども、大学を出てから一般の大人になってからの勝負というのは先ほど言った情緒力が大切なわけです。情緒力が結局総合判断力の基盤ですから、そこで決まるわけですからね。それは、学問においても最後の関門を突破する機会というのは情緒力ですから、そういうものを育てることが大切です。従って、「早く読まない大人になっちゃう」という通りに小学校か中学校までに教えておかないと。

その点では、教員養成に関しても、大学にくるとかなりあれですけれども、まだ感受性が強ければ関係ないですね。一生懸命やれば、まだまだ。何と言いますか、まだ、今の子どもは大学生でもすごく子どもっぽいですから。そして、受験勉強をしているということは、頭を使っていないということですから。頭をただ機械的に回転させているだけで、本格的に使っていないですから、従って、大学に行ってから訓練をしてあげれば、かなり変わってくる可能性はありますね。そこはまた、大学の先生の腕の見せどころですけれども、先生自身もそこで、情緒力が試されればいいのです。

道徳教育

野村 道徳という科目についてのお考えをお伺いしたいと思います。というのは、自分自身が小学校で受けた授業を考えると、各教科それぞれから、いろいろな意味での情緒的側面の影響を受けていると思うのですが、その中に、道徳という科目がありました。例えば、ヒメマスの養殖のために苦闘した和井内貞行と人生を描いた「十和田のヒメマス」という話を習って、それは今でも心に残っているのですが、似たような話が国語の教科書にも出てきたように記憶しています。たぶん、国語ではことばの面から読み込んでいくということでしょうし、道徳で扱う場合にはその事柄自体について考えさせることが中心にあるのだと思います。あるいは外国の作品で、たしか「あらそい」という題が付いていたと思いますが、学校で隣の席の子が誤って主人公の子のノートにインキをこぼしてしまった

のに対して、主人公の子がわざと仕返しをし、喧嘩になって、結局相手の人間的包容力に救われるという話がありました。その「あらい」や、ドーデーの「コルニーユ親方の秘密」などは、国語の時間に習ったか、道徳の時間に習ったか、記憶があいまいになっています。いずれも、話の内容が強く胸に残っているわけです。そこで、学校教育の枠組みの中で、国語と道徳の関係がどうあるべきかについて、お話を伺えればと思います。

それから、もう一つ、私の弟が中学校の美術の教師をしているのですが、自分の担任のクラスでは道徳も教えていて、現代の中学生にどんな道徳教育をしたらよいか、大変苦労しているわけです。私は、例えばそのように美術を専攻してきた人であれば、その専門的な観点から情緒面の教育がいろいろできるだろうと思います。藤原先生は、人間の情緒にかかわることをいろいろお話くださったわけですが、それは国語科だけにかかわるのか、あるいは他教科への広がりがあるのか、ということについてもお話しいただければと思います。

藤原 私が最近しゃべっていることに、広い意味での国語というのがあります。それは、まさに道徳なども入っています。今、教えている道徳という科目は我々のときには科目になかったのです。ある意味では、国語に入っていたのです。ですから、それを広義の国語として入れているのです。今までのことはよくわかりませんが、もし学校でやっているとしたら、一つの情緒教育に当然なると思います。

一般に道徳という教育を考えた場合に難しいと思います。なぜならば、ベルギーのある大学の先生が、日本では無信仰国家で、ある程度宗教がない国家である、大学の先生が宗教がなくてどうやって道徳教育ができるのか、というのです。欧米では道徳というのは、学校で教えるというよりも、牧師さんや神父さんという人たちが教会で教えるのです。キリスト教という代表軸が一つなのですね。そのような宗教がなくて、どうやって道徳教育を教えるのか。しかし、アメリカを見ると、日本の方がはるかに道徳的に上のように見えると思う。一部の人々が笑っているのです。一番多いのがキリスト教徒なのですから、アメリカに行って、キリスト教が現に国民全体に行われていけば、よほど、すばらしい穏やかで平安に満ちた国家だろうと思うのですが、アメリカは日本よりはるかに競争に満ちた、だましあいの社会なのです。それでも、深く反省をする。日本人は、道徳教育の他に武士道精神があった。武士道精神は先ほど言ったように、今の若い子に武士道精神は悲しいことにききませんけれども、そうではなくて、武士道精神の根本に言っていることは、勇気だとか正義観とか、あるいは恥を知る心などですね。そういうものが道徳教育になるわけです。

現在の日本というのは、もちろん無宗教ということにはほとんど異論はないのですが、武士道精神というのがあります。それがどんどん落ちてきているのです。従って、現在の日本はだめなことは何にもなくなっているのです。それは日本だけのことでなく、ヨーロッパが同じ道をたどっているのです。キリスト教の遮蔽性をどんどん暴いて、それでどんどん、無神論者が増えています。あれは、ヨーロッパがこれから、どんどん取っていく兆候なのですね。

理屈ではない形を教える

やはり、人間というのは、この2世紀間、産業革命以来、18世紀の後期以降、一体世界というのはどういう状態だったかということ、結局は幹部鼻根の大商人がいるのです。それまでは、大学で一番重要なのは哲学だとか、神学だったのです。しかし、この2世紀で神学の需要が落ち込みましたが、世界中どの大学に行っても、神学の教授は取りきれない。何が代わりに台頭したかということ、科学です。その根にある論理的思考と合理性が世界を支配してきた。ところが、人間というのは合理的とか論理的思考だけではうまくいかないのだ。では、どうしたらいいのか、世界中が五里霧中なのです。日本はそういうものを全部捨てました。そして、ヨーロッパもどんどん、捨てる教育をしている。そうすると、座標軸がない場合に、論理だとか合理というのは一体、何の教育だろうか。座標軸がなくて、合理精神だとか、論理的思考というのは単なる自己製造化の原理に他ならないのです。従って、世界中がそうになってしまう。

そうして、道徳教育を考える場合には、今言ったような読み物を読ませるとというのが一番無難なやり方です。そして、それと同時にもう少し、日本の情緒、昔からある日本に2千年以上も前からあった土着のいろいろな価値観、倫理を全部含めたもの。それから、仏教とか禅です。それから儒教、神教とか、そういうものを全部含んだ武士道精神の中にはすごい思想がいくつもあるのです。主君への忠義などを知っていれば、かなりまだ救われる部分があります。そういうものをもう少し、啓蒙していければ、と思います。

全面的にそれを教えるのではなくても、例えば、卑怯というものを憎む心というような情緒は教えなくても大丈夫だと思うのです。卑怯なことは罪だと憎むことです。要するに、理屈でない形を教えるという、道徳の時間に日本の形を教えるだけでも、だいぶ違いますね。そういうことは少し腰が引けて、無難にいうのを忘れているわけですがそれでも。そうでもないなとわかんと思います。私は肯定的です。そういう意味で、是非道徳の時間でも、現在においては情緒教育など、これからも担っていくべきですね。それで、広義の意味で国語ということで、道徳教育も入っているわけです。

国語の教え方の問題

相澤 国語科が担っていかなければならない内容が多岐にわたる中で、先生のお話を大変興味深く伺いました。先生が先ほど取り上げられた国語に関する問題にはいろいろな理由や背景があると思うのです。そこには、例えば、教え方の問題等もあるだろうと思います。それについて一つお考えを聞かせていただきたいと思います。

藤原 最初に、一部では、日本を21世紀に向けてどのような国家にしていけるかどうかという言い方が適当かどうか分かりませんが、どのような姿に行く行くはしていきたいかを考えていかないといけません。国語における言語面あるいは技術面だけに脚光を浴びさせて、ということは結局はそれをやっている、外国語特に英語において、力がつかなくなってしまうのです。母国語というのは本質的には外国語と全く違うものです。なぜ母国語とは非常に違うのかということ、さっき言ったように、情緒とかアイデンティティーということになるのです。従って、言語技術ということをしてハーバード大学やビジネス

スクールを出た人がそのようなことを言っているのではないかな、と思います。向こうではそういったディベートを中心とした弁論技術を上手に学んでいく。ディベートというのは、日本ではある程度感性なのです。あれは、確かに論理的思考の訓練としては数学よりはるかによいのです。しかし、あれをあまりやりすぎると、アメリカの男性になってしまうのです。ディベートの一番いいのではないかと私が思う点は、相手の審査を論理的に打ち破る、最大限に拡大一般化して相手の言うことを全否定する、これがディベートの指摘ですから、向こうの人々は全部これを習っていますから、そうはいても、一向に負ける一方で勝ちませんけど。そういうやり方で、これは日本の美德に非常に反します。そして、そういうやり方は品のないやり方です。従ってアメリカでしか進めないことですね。まあ、インドやアラブでも進めますけども。上品にやっていたら移りませんから。そのような技術はそこそこにするべきで、あまり一生懸命にやらない方がいいですね。

国語嫌いにさせる原因

それから、2番目ですが、私も国語は大嫌いでした。どうして嫌いかというと、一つは、言語的方面では文法事項が中学校になると、多くなりました。私が現在しゃべっていることは口文法が原型ですよ。口文法できているものを現代文法であまりやらされる部分にはかなり抵抗があって嫌いなのです。それは、日本人だけではなくイギリス人も、イギリスの文法をやるのを中学でやるのが嫌だといっています。全然知らないです。けども、うちの子どもは中国語の文法や文字は書けるけれどもできないといっていますね。そういう意味で、ある程度はしないと、正確な日本語を教えるという点でいけませんけれども、あまりやりすぎるのも。

一方、文学系統の教材にしても、しばしば先生の解釈を強要されます。同じ解釈を。あれは非常にいけません。私が、例えば、学校に行っている当時に「あさがおに釣瓶取られてもらい水」というのがありました。それを解釈したのですけれども、釣瓶は直線ですね、その直線に巻きつく螺旋と、あさがおのラッパ型の円と、その円と直線と螺旋の織りなす幾何学的美しさといったら、みんなに馬鹿にされたのです。やはり、そのように考える子がいてもいいのであって、しかし、先生としては、「水を汲もうと思ったけれども、その釣瓶で汲んでしまうと蔓が切れてしまうから、気の毒だから」というようなことをいわなければならないのですけれども、そういうのを、それに点を与えないで懲罰を与える、どうも国語を嫌いにする一つの方法かな、と私は思います。

ここに、試験や入試等において、「このとき作者はどう思いましたか」ということが、私も入試等でしょっちゅう試験に出ました。それでも、私は大学入試だと6割ぐらいしかできないのです。しかし、高校入試だと満点を取れるのです。どうしてかということ、高校入試だとはっきりしているのです。「次の5つから選べ」というときに4つはほとんどもうだめなのです。ですけれども、大学入試になると、その程度では皆できてしまうので、もっと際どい問題なのです。だから、私が考えて5つの中の3つぐらいあるのです。あのとき、この中にあったけれども、さあどれが一番強かったか、となってしまうのです。そういうようなことをして、嫌いになることもあるかなあ、と思うのです。しかし、教育とは、やはり先生のパーソナリティーがあれば、どうにか切り抜けられることで、教育にお

いてはパーソナリティーに比べれば、マイナーな部分だと思うわけです。

日本的な情緒をもっと世界へ

3番目は文化とはどのような意義をもっているのか、ということですが、先ほど、世界的などと言いました理性基幹です。論理的思考ですとか、合理精神などの世界を制したものです。その中で今、ヨーロッパが毎年増え続けていますけれども、どんどん、下り坂を下り降りています。ヨーロッパが頼りだったのですけれども、その頼りのヨーロッパがどんどん、下り降りているのです。それはどうしたらいえるかということで、やはり、そろそろアジアの出番がきているな、という感じがするのです。先ほど述べましたとおり、日本人にはいろいろなすばらしい資質、情緒等があるわけです。そういうものが、今まで世界に単なるエキゾチックなものとして、文学上で評価されただけで、現実には評価されていないのです。そういうものがだんだん、評価されていかなければいけないのではないかと。その代わり、日本人はそういう風土を世界にどんどん、発信しなければいけないわけですね。その際、例えば「もののあはれ」というものは、イギリス人だってかなりわかるのです。しかし、例えば、芭蕉はいろいろな句の中の「わび」とか「さび」がありますが、そういうものは日本人は昔、日本人しか理解できないものだと思っていました。従って、日本のそういうような「もののあはれ」と情緒、これは世界に必ず通用するものですから。その場合に、日本人の陥る悪い癖は、「もののあはれ」や情緒、あるいは一般論としてローカルな日本のものが、単なる地球上の日本という国のローカルなものであって、グローバルなものではない、従って、世界一のものにはなり得ないと勘違いするのです。それが、一番の悪いところで、ローカルなものでも 1000 年も続いたようなものは普遍的規模があるのです。そこを是非頭に置いてほしいです。

先ほどいった武士道精神というのは、もともとは鎌倉時代の武士の戦いでの習い、掟です。しかし、それがだんだん、江戸時代になって戦争がなくなって平和になってから、人間としての生きる道、道徳、倫理、行動規制などに限定されてきたわけです。それは、イギリスにおいて、もともとある「地域道」というのは中世からの「騎士道」からきているのです。最初は戦いにおける、それがだんだん、戦争がなくなってからのそういう人間としての行動起源になったわけです。そうすると、今度は内容が限定から発達過程などが特に強いのです。内容がそういうようなもの、風紀に根ざしたものは必ず普遍性があるのです。

普遍的価値の表出を

結局は、日本は今、経済繁栄しているわけです。しかし、後世、世界的にみて、日本はいつか必ず経済的には落ち込みます。もう全然だめになります。これはもう絶対的で仕方がないのです。一国が何百年ももつことはないですから。そのときになって、日本が単に世界一のレベルで、21 世紀の後半は日本という国がやたらに金を儲けまくったと一行でくくられておわりになってしまうのです。そうではなくて、日本は尊敬たる、お世辞ではなくて尊敬されるためにはどういうことをしたらいいのか、ということですね。今の

ところは、日本は完全なる成金主義になる。それは、どうしたらいいかということ、尊敬されている国というのは、現在では何をしているかということ、普遍的価値を表出した国なのですね。普遍的価値を表出した国が、尊敬されている。

例えば、イギリスはここ 100 年斜陽ですね。しかし、イギリスの言うことには皆耳を傾けます。それは、イギリスが未開性に生きている、編み出す技術が素晴らしいわけです。それから、科学においては、量子力学、あるいはニュートンの力学も、それからダーウィンの進化論、全部イギリスが発見しました。それから、美術学もイギリスです。そういうイギリスの産み出した普遍的価値に対して、世界の国々が一応敬意を表している。従って、あの斜陽国がまだ発言権を持って、まだ尊敬を浴びているのです。

フランスはフランスで、原爆事件はあふれていますし、フランスに行ったら本当にどうしてこのような民族なのだろうか、と驚きますけれども、しかし、我々は尊敬せざるを得ないのです。素晴らしいフランス文学を産み出した国であり、それから人権協定がフランスのもので。それから、ドイツもドイツで普遍的価値を持っています。やはり、科学におけるドイツの力、哲学において、古典音楽において、こういうものは全部ドイツが産み出しています。それに対して我々は敬意を表するわけです。アメリカでもそうです。例えば、映画産業、ロック、競争社会など全部アメリカのもので。そういうものを産み出している。中国は中国で、歴史的に素晴らしい文学等を産み出しているわけです。そういうのに対して、世界が一応敬意を表しているからいいことなのです。日本は、どういう普遍的価値を産むことができるか、ということがあります。それは、大規模な発明、発見をするということはないのです。私にとっては、さっき言ったようなスタンフォードの教授が私に「あのノイズは何だ」と説明を求めたのに対して、私のおばあちゃんは、ただ涙をじっとたたえて虫の音を「ああ、秋だねえ」と言う。そのような日本人の情緒は、ほとんど世界に冠たる情緒なのです。そういうような「もののあはれ」や感受性などは、これからの行き詰まった世界を打開する大きな力になるのです。例えば、漢文のものに書いてありますが、窓の棧に雪がたくさん降り積もる、そうすると、見る間にさっと融けるわけですね。日本人はそれはそれで美しいな、と見るわけですね。雪が積もっても美しい、降り始めはもっと美しい、融けても美しい、どうなっても美しいわけです。そういうような素晴らしい美的感受性なのです。

それから、もっと卑近な例で言いますと、戸籍です。戸籍というのはアメリカにもないのです。しかし、保守的な日本人としてはお互いに誰でもある。くだらないと思っている人は多いですが。しかし、あのお陰で、治安の誘起に非常に大きな影響を与えていますね。治安は世界的に悪くなって大問題です。検討がつかなくなったら、治安が悪くなる。それに対しての一つの貢献ができます。そうように、非常にローカルなものがグローバルである。そして、普遍的な価値を持っている。そういう意味で、資本で攻めるのか、PKOか、というのは仕方がないことですが、ある意味でくだらないやり方なのです。世界でだれも尊敬してくれません。いかに知性がないかということを見ているだけです。何もしないよりはいいかもしれないぐらいのものです。日本が基本的に尊敬されるには、そのような普遍的価値が必要である。それには、大発見ではなく、そのままのローカルなものでいいのだと思います。そのためには、さっき言った、多くのことは日本における特有の情緒です。そういう意味でも、国語を中心とした教科が日本において最も重要であると

思います。

教材変革の主体は誰か

甲斐ユ 今のお話と関連して、三つほどうかがいたいと思います。一つは「日本における特有の情緒」を文学作品の鑑賞を通じて国語科が扱うとするならば、その作品選択の主体としてふさわしいのは、国家なり教育委員会の教育行政に関わる人々であるのか、学校長であるのか、それとも一人一人の先生であるのか、ということです。親や子どもも選択肢に入れることができるのかもしれません。

それからもう一つは、国語教育に関わる我々で考えるべきことではあるのですが、文学を鑑賞する場合、特有の情緒を味わう、ひたるということは、今日一般に行われている指導では相当難しいように思われます。学校教育において「特有の情緒」はどのように扱うのが好ましいか、ということです。

それから三点目は私自身が体験したことに基づくものなのですが、町内会で何かを決めるといったことがありました。そのとき、みんながそれぞれに顔色をうかがいあって、一度では結論が出ないまま二度、三度と会合がもたれて、その過程で誰がどう提案し、どう議論したというわけでもないままある結論は出たものですから、日本の伝統的な「寄り合い」とはこのようなことを指すのかな、などという感想をもったことがありました。日本のそうした風潮をふまえて、これからは論理的に意見を述べる力、話し合いを通して問題の解決に至る道筋を探す技術や態度など、社会生活に生かすことができるような言語運用能力を義務教育の国語科の教育内容として考えるべきである、という議論が現在あると思います。そうしたことについて、先生はやはりそういうものが国語科の中で必要だとお考えか、それとも、国語科とは別のところで考えるべきことなのか、ということについてのお考えをお聞かせください。

藤原 国語科で読ませる教材の変革を誰がするか、ということですが、私は先ほどおそらく3つの可能性が出ていると思います。まず、担任の先生か、国語の先生か、あるいは学校であるか、その他の教育行政であるか、私は3つをみんなした方がいいのではないかと思うのです。しかし、どの一つも信用がおけないのですけれども。国も信用がおけない、教育委員会も信用がおけない、先生も信用がおけない、従ってその3つがそれぞれやって、その中から適当に選ぶ、というような形でいいのではないかと思います。そういう場合に、どこか一つが任せられると必ず反対がおきてつぶれたりするのです。従って、その3つで、文部省は文部省で、教育委員会や学校はまた別のものを、担任の先生は先生でこの本が面白いよ、ということでもいいと思うのです。国が強制的に同じものを読ませるとなると、やはり、それだけでもアレルギーを起こす人がかなりいるのです。最も、国がきちんと指導してやるということは、常に悪いわけではないのです。そのお陰で日本はすばらし水準を保っているわけです。アメリカ、イギリスがだめだというのは、そこまで国が指導するものがなかったのです。日本は下層階級というものがいないのです。みんな中流になってしまうのです。それは、やはりきちんとした画一的なものがあって、全面的に画一教育を否定することは私は絶対にできないと思うのです。

大学入試改革の必要

それから、2番目は国語の解釈の問題ですね。それも、ある意味で、一方的に国語の先生が責められるべきではないと思うのです。なぜかというと、現状において、高校以下の教育の半分以上は大学入試で規制されてしまっているのです。従って、この意味で責任は大学の方にあるのです。大学の入試が例えば「このとき作者はどう思いましたか」という問題が必ずいくつもある。そういうような状況では、勝手に先生が「ああ、この文章はすばらしいなあ」と涙ぐんで言って、「はい、次に行きましょう」では、合格しないのです。やはり「これは、このように答えないと」と教えないと、必ず父兄から文句が出ます。従って、高校の先生はそう教える、だから、高校入試はそういう人を取るように、というのでそうなる、そして、中学校の先生もそうなる、そして、小学校もです。従って、大学入試をきちんと改めない、なかなかそれはうまくいかないのではないかなと思います。

大学入試の「このとき作者は」というのを試験から追放して、もっと、例えば書かせるというようなことをさせるべきだと思います。主観的になりますが仕方がないことだと思います。客観テストにこだわってはいけないのです。

本好きな子どもに育て上げる

榎橋 先生のお話を大変面白く伺ってきたのですが、これだけいろいろな方向にメディアが発達してしまうと、本を読ませるのと同等の価値のある活動も多くなってくると思われるんですね。そういった現状の中で、読むということをどのように価値づけ、指導していくのか、その辺りのことをお教えいただければ有難いと思います。

藤原 短時間ですごい効果が出るというような方法はないのですね。従って、そういう意味で、気落ちしないでやっていくということですね。

実践されている方々にとっては、歯がゆいと思うのです。これをしたら、一気にというのがないのでね。しかし、次の世代に期待をかけるということですね。現実、私がいろいろな学校に講演に行ったりするのです。校長先生などに会うと、昭和40年代の後半から親の力が弱くなってきたというのです。「最近の子はだめですね」という子だけではなく、昭和40年代の後半から親の力が弱くなりました、親がだめになりましたと先生方がおっしゃるのです。それは、だぶん本当かな、と思うのです。やはり、一国が下り坂を下がる時には、子どもだけが悪くなる、先生だけが悪くなる、ということはありません。政治家だけが悪くなることもないと思う。もう大学の先生も、経済人も、親も何もかも全部が下がるのです。ただ、それが、教育の現場に最も劇的に現れる、それだけのことだと思いますね。従って、それを元に戻すには、やはり長い時間をかけて努力しないと元に戻らない、ということですね。

特効薬があれば一番いいのですけれども、結局、今言った問題は日本だけが直面している問題ではなくて、もう世界中です。例えば、イタリアでも、この間行って少し話したら、子どもが全然本を読まなくなったというのです。例えば、先ほど述べた「クオレ」に関して、イタリアでは「クオレ」を読んでいますか、と聞いたところ、「いや、子どもはみんなテレビゲームに夢中です」というようになってしまっているのです。ですから、も

うイタリアもだめだ、ということがわかるわけですね。

小学校における国語科の一つの勝利となる指標は何かというと、それは中学校になったときに、子どもが本を好きかどうか、ということですね。本を好きな子どもに育て上げてくれたら、もう土下座をしたい気持ちですね。それが、国語科の大勝利宣言です。小学校でうまく育ててです。というのは、言語的にもかなり教育が成功していませんと、本を読めません。今、大学の学生が本離れしているというのは、人によっては、メディア文化が活字文化に取って代わったなどと言っていますけれども、そういうことだけではなくて、単に国語力が少なく本を読むのがしんどい、ということもあるのです。それから、本を読む楽しみということをあまり味わったことがないのです。これは受験勉強を次々にさせられたためです。従って、国語科の一つの大きな目標のリトマス試験紙としては、子どもが本を好きになったか、というのを一番私は評価したいな、と思うのです。

棚橋 ついでにですけども、そうすると、変な話ですが、例えば映像を見て、情緒的な感動を受けるということは、先生にとってあまり価値がないことなのでしょうか。私個人としては、映像化されたものが、文章より感動を呼び起こすことは多々あることだと考えているのですが。

藤原 先ほどから申し上げました通りに all or nothing ではないのですね。みんなどれもあるのですけれども、映像文化にもいいものはある、漫画にもいいものがある、いろいろなものにいいものがある。しかし、それらが活字文化に取って代わって、活字はもう古いのだという考えは絶対に潰さなければいけません。特に、最近、年寄りが若者に迎合してそういうようなことに同調することがあるのです。これは最も恥ずかしい態度だと思えます。やはり、活字というものは取って代えられないものだろう。どうしても国民に本を読ませるといことは、これからもずっと必要なことであろうと思えます。

やはり、やれ人権だ何だといいますが、やはり叩き込まなければいけないものというのはあるわけです。例えば、小学校の児童に対して漢字というのは、泣いても笑っても叩き込まなければいけないわけです。それから、九九もきちんと叩き込まなくてはならないです。泣いても、笑っても、はり倒してでも、きちんと叩き込むという姿勢がないと、例えば、本を読ませるとい姿勢がないと、アメリカの小学校のように荒廃してしまうと思えます。Discipline 訓練の場としての学校ということはやはり永遠に必要なだと思えます。

論理的に読む訓練

氏原 先ほどの解釈の強要の問題についてですが、これは国語科にとっては非常に重要な問題であって、ある解釈が強要になるのか、あるいはそうではないのかというのは非常に難しいところだと思います。先生のお話で言えば例えば、論理的な思考力にかかわってですけども、要するに小説であっても評論であってもその中に論理が展開するわけです。当然設定はそれぞれ違うわけですが、その中で論理を展開していく。その論理をきちっと追うことができるというのは、先ほどの論理的思考力につながっていく部分だと思います。ですから、ある部分の表現とその中身をどう受け取るかという、つまり表現と内容との接点があって、その接点に関して十分子どもたちの納得がいくようなものを出していければ、

それは当然否定されるべきことではなくて、むしろ、国語科の大きな要素だと私は思っています。ですから、これは確認という意味でお伺いしたいのですが、解釈の強要は問題だと言ってしまうと、今、言ったような論理的思考力を育てる、本来必要な指導までも、そういうものはすべて良くないのか、みたいに聞こえては困るのではないかと。そこは分けて考えたいと思うのですが、先生のお考えはいかがでしょうか。

それから今のその映像と活字などという問題にしても、やはり我々はもっと、活字で育つものは何なのか、それから映像で育つものは何なのか。要するに活字でない子どもたちの中に育てられないものは何なのかとか、もう少しそういったことをきちんと分析していかないと、何か活字がだめだと映像だとか、映像がだめなら活字だとか、そういうような安易な選択を我々のほうでしているのではないかという気がするのです。ですから、もう少し子どもの立場に立ってそういったそれぞれの環境の中で、どういう力が育ってくるのかということをもっとしっかりと見ていかないと、なかなか先生がおっしゃったような本当の意味での情緒力も育たないし、そういう力もついてこないのではないかと思うのですが。今の解釈の問題について先生、いかがですか。

藤原 確かにおっしゃる通りだと思います。それは教材の種類によると思います。例えば論理的な文章の場合では、やはりとんちんかんな読み方をする者がいっぱいいるわけです。ちゃんと強要して、これはだめだとそれぞれの先生が論理的にある生徒の意見を、読み方を反駁できればいいですね。論理的というのは説得できるということです。生徒を説得できるような、そういう文章の場合には、そういう訓練をした方がいいと思います。ただ、さっき言ったような俳句とか歌のような場合には短いですから、特に俳句なんかは五七五で、ありとあらゆる解釈があるわけです。そういうのはやはり強要したりすると嫌いになってしまう。

それからあと一つは最初に言った論理的な文章の場合、あるいは小説の一部でもいいですけど、そのとき著者はどう思ったか等非常に際どい差で作者でも分からないようなものは、私としては大学受験に本当はあまり出してほしくないです。しかし、高校ぐらいまでは出した方がいいと思うのです。高校ぐらいだと、作者から見ても答えは一目瞭然である。あの程度は国民は分かってもらわないと困ります。従って、そういう意味では国語の解釈というのは小中ぐらいまではやはり論理的な文章を中心にきちんと先生が説明する必要があります。ただ、歌とかそういうものはあまりしてほしくない。それから、試験問題は高校まではいいけれど、大学からはちょっとやめてほしいなど、もっと他に国語の試験の方法があるのではないかと思います。

12 年を通じた人間の発達を考える

ただし、私は先ほどから圧倒的に小学校では国語にかけると言っておりますけれど、高校においてはまったくそういうことは言っておりません。高校では数学と国語はウエイトを下げてほしいと思うのです。小学校で国語とか算数に力をおくということは、理科とか社会とか家庭科等が軽視されるわけです。この科目は小学校では軽視しなければいけないと思っています。しかし、高校ではそれをもっと重視して、必修にして、例えば社会等はそれぞれの人の経験だとか知識とか、そういうものがだんだん蓄積されているいろいろな判断

ができるようになってきます。従って、高校になってから社会等は非常に能率良く、効果的に教えることができる。家庭科等が今、義務教育の最終段階ですから、そこでいろいろなものを教えるとすばらしいと思います。国語とか数学の重要性は小学校でもばっちり今は6, 7時間習うのです。10時間ぐらいまで国語を増やすと、そうやってやればですね、高校はもう選択にして良い、数学も選択でいいですね。そういうふうに、めりはりをつけた教育課程です。ところが、今は小学校は小学校、中学校は中学校と区切って考えています。やはり、12年間はまとめて人間の発達の仕方を考えながら組むということが必要だと思えます。

柳沢 今日、大変貴重なお時間をいただき、どうもありがとうございました。